

【N H K 福岡放送局賞】

当たり前の現実？

福岡市立城西中学校 3年 田道 友子

ある日、テレビを見ていたら、こんなコマーシャルが目に留まりました。赤ちゃんの泣き声とともに映された、「はいは～い今行くね～」「よしよしよしよし…」という言葉。ビルの絵とともに映された、「我が社の経営方針を発表します」という言葉。教室の絵とともに映された、「将来の夢はパイロットです」という言葉。そして最後には、「聞こえてきたのは、男性の声ですか？女性の声ですか？無意識の偏見に気づくことから、はじめませんか」という言葉で締めくくられました。

私は一番最初にこのコマーシャルを見たとき、無意識に一番目の人は女の人が、二・三番目の人は男の人だと思ってしまいました。けれど、それは決して、そう聞こえたのが問題なのではなく、そういう先入観を持って、世界を見てしまっていることが問題なのだ、と、とても考えさせられました。家族と一緒にそのコマーシャルを見ていた私は、互いに「すごいコマーシャルやね。」「知らず知らずのうちに、そう見てしまつとるんやね。」と考えたことを話しました。その話題はすぐに終わってしまったので、私がそれ以上、コマーシャルのことを気にすることは無くなっていました。

それから一年ほど経った今年の八月、私の大好きだった祖父が、病気で亡くなりました。祖父が亡くなった翌日には父の実家がある長崎に帰り、夕方からお通夜をしました。その翌日には昼からお葬式が執り行われました。みんなで祖父と最後のお別れをしてから、父の実家に戻り、親族の二十名ほどで、一緒に故人を偲んで食事をしました。私たち兄妹三人は喪主である祖母が一番お仏壇に近い上座に座ると考えていたので、下座の方に三人で座っておこうとしていました。すると祖母は、「ばあちゃんはいいけん、あんたたちがあっちに座りなさい。」と私たち三人に上座の方へ行くよう、言いました。私の母や祖母、伯母たちが食事やお酒の用意をしている間、親戚の男の人たちは、どんどん上座の方へ座っていき、結局、祖母は一番お仏壇から遠い、下座に座っていました。姉と

「なんで、ばあちゃんが喪主なのに、一番下座におるん？」

と話していると、親戚のおばさんが、

「おばあちゃんも男の人がいっぱいいる上座より、下座の方が居心地がいいでしょう？それに、部屋の出入り口に近い方が移動とか、お料理を運ぶのとか、しやすいからね。」

と、教えてくれました。そのことについての会話は、それで終わってしまったけど、私は福岡に帰ってきてからも、その食事のときの光景が頭から離れませんでした。

なぜ、女人人が食事の準備をしているのに、男の人たちは、なにも手伝わないんだろう。

なぜ、女人人が料理やお酒を運ぶ前提なんだろう。

なぜ、女人人や子供が手伝わなかつたら、「お手伝いしなさい」と言われるのに、男の人人が台所に入りさえしないのは、咎められないんだろう。

なぜ、喪主が下座に座っているというのに、誰も不思議に思っていないんだろう。

あのコマーシャルを見たときには、「考えさせられるなあ」としか思わなかつたのに、自分自身の問題になって、やつと、自分がいかに何も考えずに生きてきたか、ということに気付かされました。

男性の育児休暇や雇用条件・待遇などの見直し、女性の管理職への起用など、社会で、男女の平等を実現させるための取り組みは、日々広がっていっています。けれど、世の中には、「男は仕事、女は家事」といった考え方を持つ人や、その現状が当たり前だと、飲みこんでしまう人たちがまだいることも事実です。私に今できることは、そういう現実が当たり前の生活になってしまわないよう、疑問を持ち続けること、そして、考え続けることなのだと、今回の出来事を通して、すごく考えることができました。このきっかけを、忘れないようにしたいと思います。